

序 先行研究及び本書の目的と方法

『源氏物語』には多様な信仰が見られるが、なかでも中心となるのは住吉・賀茂・伊勢・八幡などの神々への信仰と、法華八講、仁王会などの仏事、登場人物たちの出家や出家願望に見られる仏教信仰であると見えよう。『源氏物語』の背景をなしている宗教的側面のうち、仏教に関係する研究は従来から進められてきたが、神祇に注目して行われた研究は、小山利彦氏の「神と源氏物語」⁽¹⁾、「源氏物語と神」⁽²⁾という論稿があるくらいで、依然として未開拓のままである。この小山氏の論文にしても、『源氏物語』に登場する神々と女君たちの関わりを紹介する程度であり、『源氏物語』の中で、神々の性格や当時の貴族社会における神祇信仰の意味がどのように描写されているか、また、『源氏物語』における神祇信仰の役割とはどのようなものか、という問題にまで踏み込んだものではない。しかし、『源氏物語』における神祇信仰の重要性については、日向一雅氏が、「源氏物語は朝廷から氏族、個人のレベルに至るまで幅広く厚い敬神の心情や思想を作品の基底に据えているだけでなく、物語の方法として靈験譚を構成するなど積極的に活用したのである」⁽³⁾と述べている。本書は、氏の論を一步進め、これまでの『源氏物語』研究においてあまり取り上げられてこなかった神祇信仰に着目して、神祇信仰が物語の構造や手法として、いかに取り入れられているかということを考察しようとするものである。つまり、本書の目指すところは、具体的な物語表現が生産される過程において、神祇信仰がどのような働きを担っているのかを問い、

それによって物語表現がどのような独自性を獲得し、また、どのような主題性を物語に胚胎させることになったのかを究明することである。

具体的な研究方法としては、まず、神々の伝承、平安朝における神祇信仰を概観する。これは、『源氏物語』における神祇信仰のもつ意義を正確に把握する土台となる。そして、当時の信仰の文脈に照らし合わせながら、『源氏物語』における神祇信仰を具体的に考察する。特に、神との結びつきという点からすれば、例えば六条院の構造は、春の町を紫上の〈賀茂〉、夏の町を玉鬘の〈八幡〉〈春日〉、秋の町を秋好中宮の〈伊勢〉、冬の町を明石君の〈住吉〉と捉えることができるが、こうした神々と物語の構造や方法との関わりを中心に、〈『源氏物語』における住吉信仰〉〈『源氏物語』における賀茂信仰〉〈『源氏物語』における伊勢信仰〉〈『源氏物語』における八幡・春日信仰〉の四編に分けて考察する。

第一編「『源氏物語』における住吉信仰」では、住吉神と光源氏の栄華物語との密接な関わりについて考察する。住吉神は、『源氏物語』において、須磨で暴風雨に遭遇して窮地に追い込まれた源氏が救いを求めた神として登場するが、故桐壺院も源氏の夢に現れ、源氏に住吉神の導きに従うことを諭しており、源氏も桐壺院も住吉神の霊威を信じていることが分かる。また、住吉神は、明石入道の狂信的な信仰の対象でもあった。明石入道は、明石君が誕生する前に見た夢を、子孫が皇統に関わるようになることのお告げだと信じ、明石君が生まれてから十八年もの間、住吉神に祈り続けて、娘の宿縁の成就にすべてをかけるのである。このように明石入道がその霊験を頼み、窮地に陥った源氏が救いを求め、桐壺院の霊までがその霊験あらたかな力を信じている住吉神とは、いかなる神であったのかを、住吉神の伝承と平安朝の住吉信仰の様相を通して考察してみることにする。

第二編「『源氏物語』における賀茂信仰」では、源氏の栄華に関わる賀茂神の役割と、物語の展開に不可欠な賀茂祭に焦点を絞って考察する。賀茂神は、『源氏物語』において、都を去らなければならない切迫した状況で、光源氏が無実の罪を晴らしてくれるように訴える対象となっている。また、光源氏を主体として実際の「源氏の物語」が始まる若紫巻において、賀茂神の降臨地北山で紫上が登場し、源氏の政治的世界形成の核とも言える明石姫君の入内を目前に控え、紫上だけが賀茂社に参詣しており、紫上は賀茂神と深く関わっている人物として登場している。また、賀茂伝承の型を踏襲しながら薫の誕生譚が語られ、葵祭の時分には薫と浮舟が出会うなど、これらは『源氏物語』における賀茂信仰を考えるにあたって、一つの指標となる。ここでは、まず、賀茂神の伝承と平安朝の賀茂信仰について言及しながら、『源氏物語』の基底にある賀茂信仰の意義を把握し、物語が賀茂信仰をいかに取り込み、それらが物語をどう展開させていくかについて論じてみたい。

第三編「『源氏物語』における伊勢信仰」では、伊勢神が『源氏物語』において、齋宮であった秋好中宮の人物造型に関わっていることを中心に考察する。秋好中宮は、前春宮と六条御息所との間に生を得ながら身寄りを失うが、齋宮として皇祖神たる伊勢大神に仕え、後に源氏の養女として冷泉後宮へ入内し中宮にまで達して、源氏の栄華を確固たるものとするというこの上ない繁栄の道を辿る人物である。特に、齋宮秋好は源氏と朱雀院の関心の対象であったが、それは、歴史上の前齋宮の結婚の事例や、文学作品で語られている齋宮にまつわる描写から、皇祖神天照大神に仕える女性である齋宮との関わりを欲する人が、総じて皇子であったことを踏まえた設定だと思われる。このような齋宮出身者のみが得ることのできる皇祖神伊勢の加護は、秋好中宮の栄華の背後にもあったと思われる、それを伊勢齋宮の属性を軸にして考察を進めていきたい。

第四編「『源氏物語』における八幡・春日信仰」では、『源氏物語』において八幡・春日神が、玉鬘に関わる神として登場していることに着目して考察したい。玉鬘は頭中将と夕顔との間に生まれ、父とは生別、母とは死別

し筑紫まで流離するが、のち源氏によって六条院に迎えられる人物である。玉鬘巻で、豊後介は筑紫で祈った松浦、宮崎と同じ八幡だからということ、玉鬘を上京してまず石清水八幡宮に参詣させる。また、玉鬘は藤原氏の血筋をひく姫君で、春日神との関わりを持つ人物でもある。当時藤原氏の氏神を大和の地から都に近い大原野に分祀したのが大原野社であったが、行幸巻では冷泉帝の大原野行幸が描かれており、源氏は玉鬘を冷泉帝の大原野行幸見物に赴かせる。そこで冷泉帝に魅せられた玉鬘は尚侍として出仕することになる。さらに、その尚侍として出仕させるに当っては、源氏も春日神を配慮しているのである。そこで石清水・宮崎八幡宮の縁起と平安朝の信仰、平安朝における春日・大原野信仰を概観することによって、『源氏物語』における八幡・春日信仰のもつ意義を正確に把握することにする。

注

- (1) 小山利彦「神と源氏物語」〔今井卓爾他(編)『源氏物語とは何か』(源氏物語講座第一巻、勉誠社、一九九一年)〕
- (2) 小山利彦「源氏物語と神」〔『国文学』第四〇巻三号、学燈社、一九九五年二月〕
- (3) 日向一雅「物語文学にみる信仰の諸相―『源氏物語』」〔『国文学 解釈と鑑賞』第五七巻第一二号 至文堂、一九九二年二月、七七頁〕
- (4) 秋山虔・河添房江・松井健児・三角洋一「共同討議 物語文学の人間造型―源氏物語と以前以後」〔『国文学』第三八巻一号、学燈社、一九九三年一〇月、一五頁〕

第一編 『源氏物語』における住吉信仰

『源氏物語』において、住吉神は、須磨で暴風雨に遭遇して窮地に追い込まれた源氏が救いを求めた神として登場するが、故桐壺院も源氏の夢に現れ、源氏に住吉神の導きに従うことを諭しており、源氏も桐壺院も住吉神の靈威を信じていることが分かる。また、住吉神は、明石入道の狂信的な信仰の対象でもあった。明石入道は、明石君が誕生する前に見た夢を、子孫が皇統に関わるようになることのお告げだと信じ、明石君が生まれてから一八年もの間、住吉神に祈り続けて、娘の宿縁の成就にすべてをかけるのである。このように明石入道がその靈験を頼み、窮地に陥った源氏が救いを求め、桐壺院の靈までがその靈験あらたかな力を信じている住吉神とは、いかなる神であったのであろうか。以下、住吉神の伝承と平安朝の住吉信仰の様相を考察してみることにする。

第一章 住吉神の伝承と平安朝の住吉信仰

住吉神については、従来から様々に論じられており、網羅はできないが、本章では住吉神にまつわる伝承を考察し、平安朝の住吉信仰の様相を明らかにしたい。勿論それは、『源氏物語』において、住吉神が果たしている役割の吟味に必要な限りにおいてであることは、いうまでもない。

第一節 住吉神の伝承と神格

1. 住吉鎮座の経緯

(1) 「大神」「天神」・禊ぎ祓いの神

住吉神とは、いかなる神であったのか。『住吉大社神代記』⁽¹⁾によれば、伊弉諾尊の身禊の際に生まれた、底筒男・中筒男・上筒男の三神を住吉大神と称し、『日本書紀』神代上〔第五段〕にも「其の底筒男命・中筒男命・表筒男命は、是即ち住吉大神なり」⁽²⁾と語られている。また、その底筒男命・中筒男命・上筒男命は、『住吉大社神代記』の「御神殿」の中に「右の三前は、三軍に令ちたまふ大明神」⁽³⁾とあり、住吉神は、『日本書紀』と『住吉大社神代記』においていずれも「大神」と示されていることが窺える。また、『令義解』卷二「神